



Title	中国研究集刊 月号（第12号） 田龍通信/奥付
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 1993, 12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/60949">https://hdl.handle.net/11094/60949</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

田龍通信

\*執筆者紹介（執筆順）

北村良和 愛知教育大学助教授

櫻井龍彦 中京大学助教授

大形 徹 大阪府立大学助教授

佐藤一好 大阪教育大学助教授

杉山一也 京都教育大学等非常勤講師

神林裕子 大阪大学大学院学生（日本学術振興会・特別研究員）

\*本号は、本来ならば平成五年三月に刊行の予定であったが、諸種の事情で平成五年度に延びてしまった。執筆者ならびに会員諸氏に深くお詫び申しあげる。

\*今年度は、本号以後、九月に辰号、平成六年三月に宿号と、計三回、刊行の予定である。

\*本誌の刊行について、儒教文化研究振興会ならびに市川国際奨学財団から、多大の御支援をいただいている。心より感謝の意を表し申しあげる。

\*大阪大学文学部に比較文学講座が設置され、その教授（含大学院）として福島吉彦・大阪大学教養部教授が着任した。そのため、同教授の従来のお阪大学

大学院の併任教授（中国哲学）の任は三月三十一日付をもって終った。この比較文学講座は、実質的には、中国文学と近代日本文学との併立である。すなわち、長年、大阪大学文学部に欠けていた中国文学の専攻が可能となった。今後、中国哲学講座と協力しあうこととなる。

\*研究室の異動。杉山一也助手は任期満了のため三月三十一日付をもって辞任した。中部地区の某私大が申請中の新設学部スタッフに選考されており、今年度には正式認可されると、平成六年四月一日に赴任の予定である。その間、同私大や京都教育大学等の非常勤講師として勤務する。後任助手は南昌宏（大阪大学大学院学生）である。

\*昨秋、故森三樹三郎名誉教授の七回忌が行われた。その供養として森美佐尾未亡人から研究室に高額の御寄付を忝けなくした。心より感謝の意を表し申しあげる。この御寄付は、当分、研究室がそのまま預り、森先生を記念する方向でその用途を考慮中である。なお、森先生の御遺稿の刊行をめぐって橋本氏に御寄稿を願っており、次号に掲載の予定である。

\*市川国際奨学財団の研究助成金「テーマ：中国における「百科全書」の総合的研究」は、平成四年度に続き、平成五年度も交付を受けることになった。私が代表として総合研究を進めている。

\*日本中国学会第四十五回大会は、大阪大学が準備会を担当する。九月二十五日（土）・二十六日（日）、吹田市文化会館において行なう。準備会は、すでに組織を作り、日程・予算を組み、準備を進行中である。大会の特色は、（一）シンポジウム、（二）学術参考ビデオ放映、（三）大阪大学所有の「適塾」の参観、以上の三点である。日本中国学会創立以来、昨年の大会まで四十四年間、大阪大学は大会を担当してこなかった。諸般の事情によるものであるが、今回、始めて担当することとなった。奇しくも今年度は前記のように実質的に中国文学専攻の講座が創設されたことでもあり、その記念の意味を含めて、かつ、昨年まで担当してこられた諸大学の辛苦に対する感謝の気持ちをこめて、全力投球したい。

学外に会場を求めたのは、つぎのような理由である。（一）民間団体である日本中国学会が例年の会

期・規模で国有財産である大阪大学に会場を求める、使用料として約十二万円を納入しなければならぬ。（二）昨年度から公的機関は土曜閉庁となり、電話交換手が不在となるため、土・日ともに電話が使えない。そこで電話をレンタルすると、一週間単位の契約のため、使用料を含めて約五万円が必要である。（三）大阪大学文学部だけでは、大きな会場が一個所しかないので、法学部・経済学部あるいは教養部から大きな会場をもう一つ借りざるをえない。すると、会場がばらばらとなり、相互連絡が不便である。また、他学部の施設を借りることは、儀礼上、応分の御挨拶が必要であるし、もちろん、清掃・火災等一切の使用責任を負う。（四）大阪大学近辺に商店はなく、弁当を求めない会員は（生協食堂は休業であり）大学から片道十五分の山道を往復しなくてはならない。（五）対象とする特定教室を検分したが、大体において汚れがめだつ。（六）大阪大学所有の適塾までの往復距離が遠くて、参観に不便である。（七）会員の宿泊所は、結局は、JR大阪駅や阪急梅田駅を基点とすることになるので、そこか

らの距離の便利さを考えるべき。

このような事情を考慮して前記の会館に会場を求めたのである。思うに、今後、国立大学担当の準備会が日本中国学会をその校内で行なうのは困難になると予測する。その根本原因は、哲学会場・語文学会会場の二大会場を必要とするところにある。もし一会場だけだったら楽であるが、二つもの大きな会場を必要とするところに問題がある。その意味では、学外に会場を求めるときも、依然として、この二大会場の設営という点に問題がある。すなわち大規模という点からいろいろな問題が生れている。会場使用料が高額になるのもそのためである。また土・日における国立大学の電話問題は致命傷である。

結局、会場使用料、電話のレンタル、前後の挨拶、清掃費等、基本的な点で約二十万円を必要とする。それも国立大学の薄汚い教室を使つてである。それなら始めからすべてを込みの使用料を準備して、設

備のとのつた会場専用のところを利用するほうが遙かに賢明である。「清貧」がすべてではなからう。会場予定の吹田市文化会館へ行つて驚いたのは、すでにいろいろな学会が利用している事実であった。日本中国学会は大学ばかりを会場にしてきたが、それが唯一の方法とは限らない。

私は第四十五回大会の責任者として、(一)可能な限り快適な環境を提供すること、(二)せっかく一堂に会する以上、研究発表以外になにか土産を得て帰つていただきたいこと(シンポジウム、学術参考ビデオ、適塾参観等)、(三)会員相互の一層の親睦化の場所・機会を提供すること、これら三者を骨子として計画を練りつつある。

\*大阪大学中国学会会員諸氏には、日本中国学会第四十五回大会に、ぜひの御出席を懇請申しあげる。

(加地伸行)

中国研究集刊

ISSN 0916-2232

編輯・発行

郵便振替口座番号

戻号 (1993年4月30日刊)〔総第12号〕

大阪大学文学部中国哲学研究室

大阪大学中国学会 加地 伸行

(560 豊中市待兼山町1-1, 大阪大学内)

大阪 6 - 34413 中国研究集刊

印刷・タカラ写真製版㈱